

機関番号：32678

研究種目：基盤研究 (B) (海外)

研究期間：2008～2010

課題番号：20402052

研究課題名(和文) 日米国際結婚家族の家庭秩序と子どもの文化的アイデンティティの構築
についての研究研究課題名(英文) Qualitative Psychological Studies of Family System and Construction
of the Child's Cultural Identity in Japanese-American Intercultural Families

研究代表者 矢吹理恵 (YABUKI RIE)

東京都市大学・環境情報学部・准教授

研究者番号：30453947

研究成果の概要(和文)：

アメリカ在住の夫アメリカ人・妻日本人国際結婚家族を対象に、夫の国であり多文化社会であるアメリカに居住することが、家族の文化・秩序・習慣にどのような影響を与え、そこで育つ子どもはどのような文化的アイデンティティを構築するかを質的に検討した。その結果、子どもの文化的アイデンティティは4つの型に分かれ、それを規定する要因として、①日本人母親の渡米年齢、②日本人母親の結婚前の異文化体験とアメリカ文化への心理的距離、③アメリカ人父親の結婚前の異文化体験と日本文化への心理的距離、④日本人母親とアメリカ人父親の、アメリカにおける家庭内での勢力関係が析出された。

研究成果の概要(英文)：

The purpose of this study is to show how qualitative factors of living in the husbands' country (U.S.) and in a multicultural society affects family culture, family system and family customs, as well as the construction of child's cultural identity in these families. In-depth interviews and observations were administered to Japanese wives and their children older than seventeen. The child's cultural identity was categorized into four types and constrained by four factors: how old was the Japanese wife when the family started to live in the U.S., how familiar was the Japanese wife with American and foreign culture before marriage, how familiar was the American husband to Japanese and foreign culture before marriage, and power relations between American husbands and Japanese wives.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：家族心理学・生涯発達心理学・文化心理学

科研費の分科・細目：社会科学(B)・教育心理学

キーワード：国際結婚 日米国際結婚家族 家庭秩序 国際児 アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

<2007年までの先行研究の概要

(矢吹 2002, 2004, 2005, 2007 など) >

日本在住の日本人妻とアメリカ人夫の組

み合わせによる国際結婚夫婦（以下、「日米国際結婚夫婦」）を対象に、フィールドワークによる質的調査を行った。その結果、明らかになったことは以下の点であった。

（結果1） 日本在住の日米国際結婚夫婦が構築する文化は、日本文化でもアメリカ文化でもない第三の文化であった。異文化出身同士の夫婦は、どちらかがどちらかの文化に完全に吸収されてしまうことなく、それぞれの文化が部分的に入り混じったハイブリッドな第三の文化を構築する。

（結果2） 第三の文化の構築にあたっては、夫と妻の影響力は均等に働くのではなく、どちらかが主導する形で行われる。

（結果3） 第三の文化が夫婦のどちらによって主導されるかは、以下の二つの要因によって決定される。一つは「自分の文化的志向性により強いこだわりを持つのは、夫と妻のどちら」か、もう一つは、「当該結婚を『上昇婚』であると認知するのは夫と妻のどちらか」である。日米国際結婚夫婦が構築する第三の文化は、夫と妻のうち、自分の文化的志向性により強いこだわりを持つ側によって主導され、当該結婚が「上昇婚」であると認知する側がそれにあわせることが明らかになった。

2. 研究の目的

（1） 日本人が関わる国際結婚家族において、異文化出身同士の夫婦の文化がどのようにぶつかりあい、せめぎあい、新しい家庭秩序が創出されるのか。そして、そのプロセスを通じて、個人と家族はどのような心理的発達・変容を遂げるのかを明らかにする。日米国際結婚を選んだのは、日本人女性の国際結婚相手の国籍のうち、アメリカが戦後一貫して上位を占めていることによる。

（2） 日米国際結婚家族はその生涯発達において、妻（母親）の国日本と夫（父親）の国アメリカ（場合によっては、第三国も）を往来しながら、暮らしている。先行研究（矢吹2001）は、国内調査であったため、これらの家族の日本の地域社会におけるありようしか捉えられていない。本研究で展開するのは、次のことに対する理解である。

①日米国際結婚家族が、夫（父親）の国アメリカに居住する場合、家族関係や子育てがどのように変容するか。②多文化社会であるアメリカに居住することが、家族の文化・秩序・習慣にどのような影響を与えるのか。③家庭内が多文化状況にある子どもが、自らを何人と定義し、どちらの文化をより多く摂取し、どのような文化的アイデンティティを構築するのか。

3. 研究の方法

<研究方法論：「解釈的アプローチ」を採用する必然性>

本研究は、母集団が少なく、多様性が高い集団である国際結婚の子どもとその母親を対象として、彼らの「文化的アイデンティティ」と「文化的志向性」の構造と形成過程を質的に明らかにしようとするものである。そのため、研究方法論として、「解釈的アプローチ（ガーゲン，1989）」を採用する。心理学では、従来、人間の行動を支配する普遍的な法則を計量的な方法で解明しようとする「実践的アプローチ」が主流であった。この手法は、母集団が大きく、同一性が高い集団同士の比較には適しているが、本研究のような多様性が高い集団についての構造的理解には適していない。そこで本研究では、人間行動を支配する普遍的な法則自体を想定せずに、個々の人間がおかれている社会的文脈に配慮し、人間が生きる意味世界の構造を理

解しようとする「解釈的アプローチ」を採用する。

<ライフヒストリー法と観察法>

まず、第一対象者である日本人妻（母親）に、ライフヒストリーを聞き取った。続いて、「家庭秩序の文化的志向性」について聞き取り、それを彼女らのライフヒストリーの文脈において、分析した。続いて、第二対象者である青年期以降の子ども（第一対象者の子ども）に、「自分を何人と位置づけるか」という「文化的アイデンティティ」について聞き取りを行った。

これらと同時並行で、対象者の居住環境・学校環境についての参与観察を行った。

4. 研究成果

現段階まで分析結果として、以下の2点があがっている。

結果1 <子どもの文化的アイデンティティの型>

子どもの文化的アイデンティティについては、以下の4つの型が見られた。

1 「Bicultural — 日本人でもありアメリカ人でもある」

日米両言語に堪能であり、両文化に適応するが、両文化におけるメインストリームであるというアイデンティティはない。アイデンティティの中核にあるのは、「日米文化両方をモザイク的にもつ多文化人」。10歳以降に日本からアメリカに移住したか、アメリカで小学校から高校まで日本人学校に通い、1～2年に一回は日本に滞在経験をもつ場合が多い。日本人母親が家庭内に日本的文化を取り入れようという強い意志をもち、アメリカ人父親も日本文化を愛好している。子ど

もをバイリンガルにしようとする意志は日本人母親、アメリカ人父親ともに強いが、日本人母親の理由は「自分の文化を子どもになんとしても継承させるため」という、自文化継承の意識によるものであった。

2 「日本語を話すアメリカ人」

日本語のレベルは中級から上級。アイデンティティの中核にあるのは「アメリカ人」。小学校から中学・高校まで日本人学校か、インターナショナルスクール、日本語イマージョンスクールに通っている場合が多い。日本人母親は家庭内に日本文化を取り入れようとしているが、アメリカ人父親は日本文化を拒絶はしないものの、愛好するほどではない。日本人母親が子どもをバイリンガルにしようという気持ちはあるが、その理由は、「将来どちらの国でも仕事ができるように」という実利的な側面が強い。

3 「日本語は話さないが、日本文化を愛好するアメリカ人」

日本語のレベルはゼロから初級。アイデンティティの中核にあるのは「アメリカ人」。日本人学校にも、インターナショナルスクールにも、日本語イマージョンスクールにも行っていない。ただし、子どもは第二外国語で日本語を取るなど、自分で日本語を勉強している。

母親は日本人だが、家の中で日本文化を実践していない状態。日本人母親は日本文化が嫌いで、アメリカ文化に同一視し、日本文化を意識的に家庭に入れない。子どもに対しても日本語を話さず、子どもが日本語を話すことも好まない。

子どもは、メディアを通じて日本のアニメ・漫画・TVドラマ・歌番組を愛好し、これらを自分の文化として取り入れている。

4 「アメリカ人」

日本語レベルはゼロか初級。アイデンティティの中核にあるのは「アメリカ人」。日本文化に関心を示さない。日本人の血が流れている自分が、アニメや漫画などの日本文化を愛好したり、日本的文化実践（日本のお弁当を学校に持っていく等）を行うことで、マイノリティー性が明示されることを好まない。日本のことを知ってはいるが、日本文化は好きでも嫌いでもなく興味がない状態。日本人母親は、自分自身は日本のテレビを見たり、家庭で日本料理を作ったりするが、日本文化を積極的に家庭に取り入れようという意志はもたない。子どもに日本語を習わせることも、日本の文化を継承させようという志向もない。

結果2 <子どもの文化的アイデンティティを規定する要因>

子どもの文化的アイデンティティを規定する要因として、以下の4つがあがった。

1 日本人母親の渡米年齢

渡米年齢が高校卒業以下であると、渡米後のアメリカ文化への同一視が強まり、家庭内で日本的文化実践を行おうという志向が弱くなる。

日本で大学・短大以上の高等教育を受けてから渡米した場合は、家庭内で日本的文化実践を行おうという志向が強くなる。

2 日本人母親の結婚前の異文化体験とアメリカ文化への心理的距離

結婚前に、異文化を愛好したり、外国に行く体験をしている場合は、結婚後にアメリカで子どもをバイリンガルにし、家庭内をバイカルチュラルにする志向が強まる。これは、

日本におけるバイリンガルの市場的価値を認識しているためだと考えられる。

3 アメリカ人父親の結婚前の異文化体験と日本文化への心理的距離

日本人母親が家庭内で日本的文化実践を行おうとしても、アメリカ人父親がそれへの関心がない場合には、家庭内に浸透されることができない。母親のみが日本人コミュニティーと付き合うが、子どもと父親はそこには入らない。

他方、アメリカ人父親が結婚前に異文化体験があり、日本文化への心理的距離が近く、日本的文化実践に関心が高く、日本人コミュニティーとも関わる場合は、日本人母親は積極的に日本文化を家庭内に取り入れることができる。

4 日本人母親とアメリカ人父親の、アメリカにおける家庭内での勢力関係

夫婦の勢力関係を規定する要因として以下の3点が上がった。

① 自らの文化的志向性へのこだわり（矢吹2011）の強さ

夫婦のうち、自らの文化的志向性へのこだわりが強い側の文化的志向性が家庭内で実践され、こだわりが弱い側は、強い側に合わせることになる。その結果、こだわりの強い側の勢力がより強くなる。

② どちらの出身の地域で暮らすか

家族が暮らす地域社会における家庭のマネジメントにおいて、より有能性を発揮できる側の勢力が強くなる。国際結婚は居住地が国境を越えて移動する場合が多い。夫婦にとっての第三国に住む場合は、夫婦の勢力関係の差はさほどない。しかし、夫の国か妻の国に住む場合は、居住地出身の側が、家庭の

代表者となって地域社会との折衝にあたる。それが、夫婦の勢力関係に影響を与える。アメリカに居住する場合は、日本人母親はアメリカ人父親を「頼れる人」と認知するが、日本に居住する場合はその認知が低くなる。

② 夫婦の性役割観と地域社会の性役割観の一致度

アメリカ人父親の経済力が日本人母親の期待するものよりも弱い場合、社会の性役割観がより伝統的な日本に居住する時は、日本人母親はそれを大きな問題として意識する。他方、社会の性役割観がより伝統的でないアメリカに居住する場合は、日本人母親はアメリカ人父親の経済力のみに頼ろうとせず、必要であれば自らも経済力を得ようとする。これが、夫婦の勢力関係に影響を与える。

<補足的結果>

日本人母親に関する補足的結果として、次の2点があがった。これらへの検討は今後の課題として残された。

① 中年期にさしかかる日本人母親による、自身の老親の長距離介護の問題

長距離介護は同国人同士の結婚の家族にもみられる問題だが、国際結婚家族の場合、老親との距離が国境を越えた「超長距離」となるため、物理的・時間的・経済的により負担となる。また、インタビューの中で「老親を介護すること」、「老年期の親子関係」についての日米間の意識の違いが語られ、夫婦間でこれをどのように調整するかが課題となっていた。

① グローバル企業勤務の夫をもち、国内外移動型の生活形態をとる日米国際結婚家族の日本人母親のキャリア形成の問題

日本人母親のキャリア形成については、高学歴の母親はどの国でも出来る異文化間コ

ンサルタント等の仕事についていた。その場合でも、度重なる転勤により、職業上必要な人的ネットワークの構築の難しさを母親達は認識していた。これについては、同じく移動型のライフスタイルをとる日本人同士の夫婦の妻の認知との比較が要検討課題である。さらに、日米国際結婚家族の日本人母親のキャリア形成が成功している場合とそうでない場合とでは、子どもの文化的アイデンティティはどのように異なるかも今後の検討課題である。

<本研究の限界>

本研究では、子どもの文化的アイデンティティについては、日本人母親のアメリカ文化への「心理的距離」と、アメリカ人父親の日本文化への「心理的距離」が関わっていることが示唆された。しかし、以下のことは明らかになっていない。

①在米の日本人母親のアメリカ文化に対する、及びアメリカ人父親の日本文化に対する「心理的距離」が何によって形成され、それが子どもの教育実践にどのように現れ、結果的に子どもの文化的アイデンティティ形成にどう関わっているか。②①が子どもの国籍選択にどうつながっているか、③学校など家庭外の要因が、子どもの文化的アイデンティティと国籍選択にどのように関わっているかも明らかにされていない。さらに、④多文化的な文化的アイデンティティを身につけた子どもが、社会人としての活躍の場をどこに求め、新しい国際秩序のどこでどのように機能しているかを明らかにすることも、今後の課題として残された。

5 主な発表論文等

[雑誌論文 計2件]

①矢吹理恵 2009. How is Culture Determined in an International Marriage Family? -The Effect of Their Positioning in the Local Community-. 武蔵工業大学環境情報学部紀要. 第十号. 77-83.

査読無

②矢吹理恵 2008. 日米国際結婚家庭における子どもをめぐる文化実践 — 親が子どもの設定する文化環境と学校選択に注目して. 武蔵工業大学環境情報学部紀要. 第九号. 86-94. 査読無

[学会発表 計2件]

①Rie Yabuki 2011年3月25日. How does positioning in the local community determine the culture of the international marriage family?. 日本発達心理学会. 第22回大会. 東京学芸大学. (東京)

②矢吹理恵 2009年3月24日 日米国際結婚家庭における定住地決定について — どこに根を下ろすか —. 日本発達心理学会. 第20回大会. 日本女子大学. (東京)

[図書 計4件]

①矢吹理恵 2011. 国際結婚の家族心理学 — 日米夫婦の場合 —. 風間書房.

②矢吹理恵 2010. 日米夫婦と日米夫婦. 柏木恵子編著. 「よくわかる家族心理学」. ミネルヴァ書房. 66-69.

③矢吹理恵 2009. モノが語る意味 — 国際結婚家庭における居住空間デザインと身体装飾 —. 箕浦康子編著. 「フィールドワークの技法と実際Ⅱ」. ミネルヴァ書房. 110-125.

④矢吹理恵 2008. 国際結婚家族の家庭文化は何によって決定されるのか — 地域社会における位置取りとの関連について —. 柏木恵子監修. 塘利枝子・福島朋子・永久ひ

さ子・大野祥子編. 「発達家族心理学を拓く — 家族と社会と個人をつなぐ視座 —」. ナカニシヤ出版. 112-125.

6. 研究組織

研究代表者

矢吹 理恵 (YABUKI RIE)

東京都市大学・環境情報学部・准教授

研究者番号：30453947